

投稿は〒104・8011(住所不要)朝日新聞  
オピニオン面「私の視点」係かsiten@asahi  
.comへ。電子メディアにも収録します。

東京大生産技術研究所助教

ひやま きょうすけ  
樋山 恭助



今夏の節電を考えると少し憂鬱だ。空調の利用を極力抑えるなど、省エネの最終手段は我慢なかもかもしれない。しかし、我慢により失うものを十分に考慮する必要がある。「昔はエアコンがなかったのだから、我慢すれば乗り切れる」といった根拠があいまいでスポ根的な思想で空調を停止してしまつのは危険である。

過去と現代では建築の利用形態も気象も異なる。窓が開けられず通風も行えないオフィスビルでは、冷房なしだとすぐに蒸し風呂状態となる。ヒートアイランドによる都市部の高温化により、熱中症患者は増加の一途をたどっている。空調の抑制による節電は必要だが、健康も労働者の生産性への影響も考慮する必要がある。

冷房は屋外から室内に流入する熱だけでなく、室内の照明や人体、OA機器から排出される熱を除去する目的もある。高気密・高断熱で高度のOA化が進んだ現代のビルでは、この室内からの発熱を除去するために浪費されるエネルギーの割合が大きい。

この夏の節電対策として、空調に関しては冷房温度を上げることが強調されている。政府広報などでは、冷房の設定温度を1度上げると約10%の節電になるといいますが、それは室内からの発熱が少ない住宅の場合だ。OA化が進み室

オフィスの夏

## スポ根的な節電は危ない

内からの発熱が多いオフィスでは、冷房を1度上げても同等の効果は期待できない。大規模なオフィスビルにおいては、冷房ピーク発生日において5%程度の節電にしかならないとの報告もある。つまり、室内からの発熱を減らさない限り節電効果は限定的なのだ。

オフィスの労働環境の悪化を避けつつ、冷房のエネルギー消費を抑制するためには、熱の発生を抑えることを第一に考えるべきである。不必要な照明やOA機器を切ることは、消費電力を抑えるだけでなく、そこから発生する熱を減らすことにつながる。

また日本の照明は欧米と比べて「明るすぎる」とも言われている。現在の照明を半分に減らしても、机上のタスクライトを併用することで、十分な明るさを確保できることが多い。条件によって異なるが、照明を半分にして室内の発熱を抑えることで、空調設定温度を1度上げるのと同程度の効果が期待できる。

無慮な室温の高温設定で労働者の生産意欲と効率を落とせば、仕事が多量に続き、労働時間の増加や、最終的には増エネになりかねないのだ。1時間早く起きて涼しい時間帯に仕事をし、仕事を早く切り上げて家族と過ごす、そんな楽しい我慢で夏を乗り切りたいものだ。